

## 新しい世紀を 迎えて

学長 大久保 哲夫



### 二〇世紀を顧みて

激動の二〇世紀が終わり、二一世紀を迎えた。世紀が改まったからといって直ちに大学が変わるわけではないが、新しい世紀の幕開けにあたり奈良教育大学のこれまでをふり返り、これからのあり方に思いを馳せてみることにしよう。

奈良教育大学は奈良師範学校・奈良青年師範学校を前身として戦後の学制改革によって生まれた大学であるが、師範学校令により明治二一（一八八八）年に開校された奈良県尋常師範学校をさらにさかのほれば、明治七（一八七四）年に奈良県が小学校教員養成のために設立した東楽書院がその出発

点となる。いずれにしても一九世紀から二〇世紀にかけて、奈良県をはじめ全国の教育界に多くのすぐれた人材を送り出してきたことになる。

師範学校は初等教育の教員養成を目的として設置された学校だから、国の教育政策に沿って教育活動が営まれることになるが、とりわけ昭和一〇年代には戦時体制下の教育が強まり、それが昭和二〇（一九四五）年の敗戦を境に一変して民主主義教育に変わるなど、まさに激動の時代を経ってきたといえる。

そして戦後の学制改革により教員養成は大学で行うことになり、師範学校が大学になったということは、わが国の教員養成にとって意義深いものがあつた。それは大学における教員養成により、専門的な学芸の研究および教授を通して、教師を志す学生に深い専門性と高い教養、そして豊かな人間性

を育てることができるところである。昭和二四（一九四九）年に開学された奈良学芸大学は、昭和四一（一九六六）年に奈良教育大学と校名を変更した。教員養成を目的とする大学という性格を明確にするという国の方針によるものであつたが、内容上は大きな変化はなく、むしろ大学における教育研究の充実発展という意味では、昭和五八（一九八三）年に発足した大学院の方が意義深い。

昭和六〇年代に入ると少子化等

による教員の需給問題が生じ、国立の教員養成大学・学部には教員養成課程（ゼ口免課程）の設置が検討されるようになり、奈良教育大学も平成七（一

九九五）年にそのような課程を設置した。

いずれにしても二〇世紀の末期に至り、教育大学としてのあり方そのものが問われるようになってきたといえる。

### 個性輝く大学として

二一世紀は科学技術のさらなる進歩や国際化の進展、社会・経済のいっそうの高度化・複雑化に伴い、教育研究の質の高度化や多様な人材の養成が求められ、また少子・高齢化のなかでの進学率の上昇や生涯学習要求の高まりもあり、これまでより幅広い層の人びとに対し多様かつ充実した大学教育の提供がいっそう重要となつてこようとしている。

そんななか、全国の国公私立大学はそれぞれの理念・目標に基づき、総合的な教養教育の提供を重視する大学、専門的な職業能力の育成に力点をおく大学、地域社会への生涯学習機会の提供に力を注ぐ大学、最先端の研究を志向する大学、また、学部中心の大学や大学院中心の大学など、それぞれの目指す方向のなかで多



キャンパス内

様化・個性化を図りつつ発展していくことが求められてきている。

さらには、こうした個性輝く大学としての発展のためにも国立大学の設置形態を改めることが重要だとして、いま国立大学独立行政法人化の検討がすすめられている。

奈良教育大学は一九世紀以来一貫して教育の専門家を養成することを目的としてきており、

学部・大学院がその任務を負っているが、またこれからはより広く総合的な教養教育の提供や、地域社会への生涯学習の機会も提供にも力を注いでいかなければならない。

これからも大切にしたいこと

そうした方向での奈良教育大学の、大学としての個性化ともいえるべきはなんだろうか。ここではそのキーワードとして歴史、国際、文化、自然

の四つをあげてみた。



校内にある吉備塚の記念碑

まず一つ目の歴史についていえば、奈良教育大学の位置する奈良市は八世紀にわが国の都があった所で、やがて平城京遷都千三百年を迎えようとしている。また奈良県には平城京の前の日本の古代国家成立の舞台となった明日香や、その前の大和王権

いきたいものである。そのことはまた二つ目の国際化にもつながる。すなわち古墳時代、飛鳥時代、奈良時代を通じて大陸から多くの人や技術、学術文化がわが国に入り、またわが国からも遣隋使・遣唐使として多くの優れた人材が大陸を助けた。そのうちの一人の吉備真備に因んだ吉備塚が奈良教育大学の構内にあるのも、なにかの



附属農園からの高円山

発祥の証ともいえる数多くの遺跡・古墳群もあり、まさに日本の古代史の宝庫ともいえる地域である。

因縁であろうか。奈良教育大学はいま世界の多くの国々から留学生を迎え、また学生諸君も国際交流協定大学（全土六大学）などで学んでいる。こうした交流を通して国際感覚を育んでいきたいものである。

こうした恵まれた歴史環境のなかで学び、歴史的な感覚を磨いて

三つ目の文化と四つ目の自然はある意味では対立する概念といえるが、歴史という長い時間軸と国際化という広い空間軸のなかで生み出されてきた豊かな文化を継承・発展させていく営みに積極的に参加していくとともに、海こそないが美しい緑と水という、恵まれた自然的な環境の多いこの奈良の地において、数千年前から自然と共に



「奈良学校」の瓦

生してき人間的知恵に学びながら、これから自然との共生の新たな営みを創り出していきたいものである。